様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２００８１

研究課題名（和文）近世日本と東アジア諸国における人神祭祀観の比較研究

研究課題名（英文）A comparative study of the customs of deifying the person in early modern Japan and East Asian countries.

研究代表者
井上　智勝（INOUE, Tomokatsu）

埼玉大学・人文社会科学研究科（系）・教授

研究者番号：１０３００９７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世日本と東アジア諸国における人を神として祭る行為を、当時規範意識の基盤となっていた儒教思想と、各国の自国意識との関連で捉え、日本の人神祭祀と宗教史に対する通説的理解を見直したものである。人神祭祀に即して、従来神道か仏教かという文脈で論じられてきた前近代の日本の宗教史に儒教祭祀という視点を加味する必要があることと、明治維新期の宗教政策は祭祀の儒教化として把握できること、前近代の日本の宗教史は国という枠組みを超え圏として把握せねばならないことを指摘した。また、近世日本を理解するためには、同時期に皇帝（天皇）と覇王（将軍）という二元的な政体を有した越南との比較が有効であることを示した。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the following points. We cannot solve the history of religion of Japan only by the research to Shintoism and Buddhism. Therefore, it is necessary to study the influence of Confucianism. The religion policy of the Meiji Restoration government was strongly affected by the influence of Confucianism. A comparative study with Vietnam is effective for the historical study of early modern Japan. In order to study the history of religion of Japan, We need to understand the history of religion of the kanji cultural sphere.

研究分野：日本近世史・宗教史

キーワード：日本宗教史　神道　儒教　功臣　ベトナム　田村神社

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の開始当初、日本は東アジア諸国との友好的な交流に阻害的に働く問題を少なからず抱えていた。このような状況の中、日本の思想・歴史・文化を東アジア規模で捉え直す研究が盛行していた。かかる動向は、東アジア諸国との新たな関係を構築する上で重要な動向である。私もそのような動向に意義を認め、15 世紀から 18 世紀の国家祭祀の比較研究に着手していた。

（２）東アジア諸国との友好的な交流に阻害的に働く問題は、多く第２次世界大戦時に由来する。私がこれまで進めてきた日本の神社史・神道史研究の立場からすれば、靖国神社問題が大きな焦点となっていた。その解決のためには、靖国神社それ自体に関する現在的な検討のみならず、その背景にある、人を神に祭る、という意識・思想を、東アジア規模で捉えてゆくことが有効である、と考えた。

２．研究の目的

本研究は、近世日本と東アジア諸国における人を神として祭る行為を、当時の日本を含む東アジア諸国において支配的な規範意識の基盤となっていた儒教思想、ならびに各国の自国意識との関連で捉え、それらを相互比較検討することによって近世日本と東アジアの人と神に対する感覚の差違と特性―特に日本のそれ―を把握することを目的とした。

３．研究の方法

（１）本研究では、国境という概念をひとまず取り払い、東アジアという共通の文化圏の中で日本の祭祀・宗教文化を位置づける方法を採った。本研究でいう東アジアの範囲は、近世に漢字・儒教文化を共有した国々、つまり中国・朝鮮・ベトナム・琉球と規定した。すなわち本研究は、個々の国ではなく漢字・儒教文化圏という圏域の中で宗教文化を把握する方法に立脚して遂行された。

（２）日本・海外ともに、研究に必要な文献(図書・古文書などの原史料)の実物・複写・写真撮影による収集と活字化された文献の活用、必要に応じた現地調査、それらによって得られた情報の解析によって研究を推進した。

４．研究成果

（１）従来の日本の人神祭祀論の捉え直し

従来の日本の人神祭祀に対する通説を見直す視点を提示した。日本の人神祭祀は従来、御霊信仰や国学の幽冥思想との関連で捉えられていた。しかし、そこに儒教祭祀や、東アジアの大陸諸国で行われていた人神祭祀の在り方を加味する必要を提起した。以下、主な点を記す。

①　日本における武家霊廟から神へという過程に、儒教の「神」観念が関係していたことを解明した。一部の諸侯の菩提寺（宗廟に相当する）や墓所には、儒教の宗廟祭祀の祭法である昭穆秩序が反映されていた。これは、神道か仏教かという、従来の人神祭祀や将軍・諸侯の神格化に対する解釈に修正を迫りうる発見である。

②　釈奠から派生した人麻呂影供などを媒介にした、儒教祭祀の文脈からの人神祭祀の影響を指摘した。人麻呂影供と釈奠の密接な関係は、夙に指摘されていたところであるが、本研究ではそれを人神祭祀の文脈に載せて再評価した。

③　中国の人神祭祀の日本への影響

中華の自国意識を有する中国（明・清）では、儒教の経典に基づく祭祀が行われていた。儒教こそが、文明国の依拠すべき規範であるからである。朝鮮・越南も、そのような規範意識を共有し、儒教に基づいた政治・国家祭祀が行われていた。儒教祭祀では、人が神になることは珍しくない。本研究は、このように東アジアで文明国の標章となっていた儒教の経典に基づく方法によって神格化された

功臣・忠臣祭祀の在り方が幕末期の日本にもたらされたことを指摘し、このことが明治維新期に始まる日本の功臣祭祀に影響を与えたことを見通した。鴉片戦争で戦死した陳化成の祭祀は、和気清麻呂ら日本の功臣祭祀と関連させて捉え得た。また、欧米の脅威が迫る中、当該期の東アジアに儒教道徳律とそれに基づく人神祭祀という共有される文化が存在していたことを提示した。なお、中華皇帝から冊封を受けるなど、中国と密接な関係を有した琉球では、人神祭祀が強く認められなかったことも附記しておく。

（２）日本と越南の国家祭祀の比較

中国を中心とする漢字・儒教文化圏の辺縁にあって、近世に皇帝（天皇）と覇王（将軍）という二元的な政体を有した日本と越南の国家祭祀を、両国の自国意識に即して検討することで、その共通性と差異を明らかにした。

①　近世の日本と越南の政体の近似は、ベトナム史の研究者によって指摘されていたが、これを日本と比較したのは、本研究が最初の試みである。東アジアにおける日本理解のためには、越南研究を行う必要があることを喚起した点は本研究の成果である。

②　南国（南の中華）の自国意識を強く有する越南では近世、中国（越南にとって北の中華）同様、儒教の経典に則った祭祀が国家祭祀として行われていた。その中で、人神祭祀として功臣祭祀・恩祀壇などの祭祀が行われていた。一方、近世日本の国家祭祀は神道祭祀であった。そこには功臣祭祀などは存在しない。日本における功臣祭祀などの導入は、明治維新期に神道式で導入される。この差異は、両国の自国意識の差異と、それに基づく儒教受容の姿勢に求められる。

（３）日本における儒教と神道の関係性解明

近世日本の政権を掌握した江戸幕府は、積極的に儒教を受容しようとした。しかし、近世日本の儒教受容は、大陸諸国で行われていた儒教を全面的に受容するものではなかった。その理由の一つは、儒教受容の伝統の薄い中、江戸幕府がその成立期において、基督教への対抗上仏教教団を活用せざるを得なかったところにある。その結果、日本の葬祭は仏葬となり、広く儒葬を受容することが妨げられた。大陸諸国と同様に宗教イデオロギーの柱として儒教を据えることができなかった近世日本の支配者層は、日本の自国意識「神国」に依拠した「神道」が、儒教と同等の文明を具えて古くから日本に存在した、という言説によって、日本もまた東アジアの儒教国と同等の文明国であるとする論理を編み出した。したがって、日本の儒教受容は「神道」という形をとって進行することも少なくなかった。神授一致の立場は、その典型である。本研究は、そのような認識と「神道」の展開が、日本の人神祭祀を規定してゆくことになることを明らかにした。

（４）明治維新期の宗教政策の捉え直し

以上のような本研究の成果を踏まえれば、これまで神道国教化と捉えられてきた明治維新期の宗教政策は、実は日本化された儒教祭祀の構築であったことが諒解される。明治維新期に始まる功臣祭祀は、それ以前の日本には見られなかった新しい形の国家祭祀である。その先蹤が、儒教祭祀として展開していた大陸諸国の国家祭祀にあったことは、陳化成の事例から明瞭である。また、幕末期の陵墓の半ば強引な比定は、天皇霊を皇居に一括して祭祀する「皇廟」の創出に繋がった。これは、日本の歴史上儒教祭祀の在り方に最も近い天皇の祖先祭祀の在り方であり、日本における儒教祭祀的な意味での宗廟の創出である。さらに、仏教の排斥も、儒教を政治イデオロギーとして採用した大陸諸国が斉しく採った政策であった。

（5）日本宗教史の方法論に対する提言

①　本研究は、人神祭祀を主軸として、仏教・神道を双柱としてきた日本宗教史に、儒教という要素を加味する必要があることを提示した。それを踏まえ、近世日本の宗教構造を仮説的に提示した学会報告を行った。

②　従来の日本の人神信仰研究は、日本という枠組みで当該問題を理解しようとした、きわめて閉鎖的な方法論に則っていた。本研究は、日本の人神祭祀が、儒教祭祀、あるいは中国を中心とする東アジアの人神祭祀の在り方の中で把握されねばならないことを示した。このことは、祭祀を含む文化現象が、国という枠組みでは把握できないことを再確認した意味も有する。

（6）成果の国際的な普及

研究成果の一部を国際学会で報告し、また中国語・韓国語に翻訳し、海外の研究者との議論の共有を図った。

（7）地域貢献

坂上田村麻呂を祭神とする人神祭祀の神社である滋賀県甲賀市の田村神社文書を分類・整理し、仮目録を作成した。目下未公開であるが、今後、関係機関と調整の上、公開してゆく予定である。

（8）研究成果の総括

日本では、御霊信仰の文脈での人神祭祀が行われてきたところへ、近世日本の個性的な儒教受容によって、儒教祭祀に由来する人神祭祀が導入された。それは、近世日本の儒教受容の在り方に規定されて、神道の形を取る場合があった。この点、儒教の受容と実践を、人神祭祀を含む祭祀に反映させていた大陸諸国とは異なる。日本では人神に対し怨霊がこれに転ずるという感覚しか有さなかったが、大陸諸国では功臣など生前の功績で人が神になることが一般的であった。これが日本と東アジアの大陸諸国の人と神に対する感覚の差違と特性であった。しかし近世日本には、儒教受容の試みに伴い、大陸諸国の人神認識が流入することになった。近世日本でも人が神になる事例は多く見られたが、そこには吉田神道のみならず、近世日本独自の儒教の受容の在り方が反映されていたのである。明治維新期になされた、儒教祭祀の影響を受けた功臣祭祀の導入は、近世を通じてかかる意識が定着する中、陳化成の紹介などによって、人が神になることに対する違和感がより減退していったために円滑になされた。御霊信仰によって規定されてきた日本の人神祭祀の在り方は、近世初頭の時代状況に掣肘された個性的な儒教受容のために、近世という時代を通じて大きく変更されることになった。そのような近世日本の宗教史の展開は、明治維新期に日本化された儒教祭祀の構築として帰結する。神道国教化政策は、そのような内実を有するものであった。以上のように本研究では、近世日本と東アジアの人と神に対する感覚の差違と特性を把握するという当初の目的を超えて、従来の日本の宗教史と明治維新期の神道国教化を捉え直す成果を結実させることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①<u>井上智勝</u>　近世日越国家祭祀比較考―中華帝国の東縁と南縁から「近世化」を考える　清水光明編『「近世化」論と日本』（アジア遊学 185）2015　186―204 頁　査読無

②<u>井上智勝</u>　民衆宗教の展開　『岩波講座日本歴史』14　近世５（岩波書店刊）　2015　179―213 頁　査読無

③<u>井上智勝</u>　日本宗教史における儒教の位

置―人霊祭祀に焦点を当てて―　『日本仏教綜合研究』13　2015　105―125 頁　査読有

④井上智勝　神になった歌聖と俳聖―日本近世における人神祭祀の展開―　宗教研究 88 別冊　2015　359–360 頁　査読無

⑤井上智勝　近世日本武家霊廟論序説　―神・仏・儒のあいだ―　宗教研究　87 別冊 2014　293–294 頁　査読無

⑥井上智勝　明治維新と神祇官の「再興」島薗進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教１　将軍と天皇』2014　147-178 頁　査読無

⑦井上智勝　式社巡拝・皇陵巡拝の思想的淵源　日本思想史学 45　2013　26-34 頁　査読有

〔学会発表〕（計９件）

①井上智勝　東アジア諸国の国家祭祀　関西大学東西学術研究所第９回研究例会 2016.1.22　関西大学千里山キャンパス(大阪府大阪市)

②井上智勝　近世日越国家祭祀比較考　附.琉球・朝鮮
海域アジア史研究会　2015.10.31　大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）

③井上智勝　近世日本の宗教構造―国家権力と異端的宗教活動をめぐって―　京都大学人文科学研究所ワークショップ（異端的宗教活動の近世）2015.7.11　京都大学人文科学研究所（京都府京都市）

④井上智勝　日本宗教史における儒教の位置―近世の人霊祭祀に焦点を当てて―
韓國日本學會　第 90 回國際學術大會　東國大学校艸墟堂セミナー室(大韓民国・ソウル市)　2015.2.7

⑤井上智勝　日本近世の宗教構造とその展開―人霊祭祀に焦点を当てて―　日本仏教綜合研究学会　第 113 回大会　立正大学大崎校舎(東京都品川区)　2014.12.13

⑥井上智勝　神になった歌聖と俳聖―日本近世における人神祭祀の展開―　日本宗教学会　第 73 回学術大会　同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)　2014.9.13

⑦井上智勝　近世日本武家霊廟論序説　―神・仏・儒のあいだ―　日本宗教学会　第 72 回学術大会　國學院大學(東京都渋谷区)　2013.9.8

⑧井上智勝　中華帝国の東縁と南縁から「近世化」を考える―日本とベトナムの国家祭祀を中心に―　歴史学研究会日本近世史部会・ヨーロッパ近世史部会合同シンポジウム　東京大学駒場キャンパス 18 号館１階ホール(東京都目黒区)　2013.01.12

⑨井上智勝　式社巡拝・皇陵巡拝の思想的淵源　日本思想史学会大会　愛媛大学南加記念ホール(愛媛県松山市)　2012.10.27

〔図書〕（計１件）

①井上智勝　吉田神道の四百年―神と葵の近世史―　2013　227 頁　講談社

６．研究組織

（１）研究代表者

井上　智勝（INOUE, Tomokatsu）
埼玉大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：１０３００９７２